

天京事変に関する問題点

河 鱒 源 治

1856年9月2日(咸豊六年八月四日、太平天国丙辰六年七月二七日)に太平天国の都天京(南京)で北王韋昌輝が東王楊秀清を殺したのを発端として2カ月余り続いた「天京事変」或は「天京内訌」「楊韋事変」などと呼ばれる指導者間の権力闘争はその原因・経緯などについて不明な点が少なくない。それは事変が主として閉ざされた天京城内とくに王府内で展開し、指導者相互の利害が絡み、情報は俘虜になった兵勇、投降した太平軍の将兵、難民などからの伝聞、偶然太平軍内にいた西洋人の見聞に拠っており、翼王石達開、忠王李秀成の自供も事変関係者の証言とはいえ、事変の記述には相互に矛盾が見られる。本稿では事変のポイントとなる事項についての史籍史料の記載を比較検討し、それに関する近年の中国における研究の若干を紹介して考察しようと思う。

I 遍封万歳の問題

天京事変の誘因は東王が天王に万歳に封ずるよう要求したことにあるといわれる。これについて張汝南『金陵省難紀略』(以下『紀略』と略記)には東王は天父下凡と称して天王を東王府に招き「東王は天王と同じ天父の世子で功労が大きいのになぜ九千歳に止まっているのか。」と問い、天王は「東王は天下を取り万歳に相当する、その世子も万歳に当る。」と答えた、とある。滌浮道人『金陵雜記・付金陵統記』(『雜記』と略記)は東王は天王の位を奪おうとして天王の党を分けて城外に出し、私に太平天国真命主楊秀清の印を刻し、天父下凡を称して東王府に天王を招いて跪かせ、「天下を取ったのは誰のおかげか。」と問い、東王であると答え

ると、なぜ東王に報いないのかといふ、天王は衆に向って以後東王とその世子を万歳と称するといふ、衆が承諾すると東王は少し怒りを緩めた、とある。『紀略』の序には「惟東北賊遞殺一節、係訪問確切、得以附入。」とあり、『雜記』に付した金陵統記の冒頭には「此卷係近日情形、皆聞之於遇難播遷之人及被擄脫逃之輩、方能知之最詳、言之最確、復為哀成一編。」とあり、両書共に咸豐6、7年に編修されたというので事変後間もない頃の巷説を記したように思う。「李秀成自述」（羅綱編『李秀成自述原稿注』に拠る）は「因東王天王実信、權托太重過度要逼天王封其万歳。那時權柄皆在東王一人手上、不得不封、逼天王親到東王府封其万歳。」と天王が東王の権勢に押されて万歳に封じたとし、『石達開自述』（三略彙編本による⁹⁾）には「洪秀全本欲殺楊、口中不肯、且故意加楊秀清為万歳、韋昌輝忿氣、把楊秀清殺了。」と天王が故意に東王を万歳に封じて北王を怒らせて殺させた、という。又両江総督怡良が金陵内乱の状況を探って上奏した報告（咸六・九・二四、10、22）には「八月十五日、楊逆向洪逆索取偽印、意図并吞、洪逆將韋逆調回、殺死楊逆及其親屬」とあり²⁾、東王が玉璽を作り、篡奪の意図があったとする。佚名『平賊紀畧』巻上³⁾に咸豐六年八月に「向大臣薨後、金陵羣逆相慶、偽東王楊秀清有自立意、令其下呼万歳、洪逆召偽北王韋昌輝偽翼王石達開回、密謀凶之。」とあって万歳と呼ばせ、自立を意図したとし、方玉潤『星烈日記』⁴⁾は十月初七日に武昌漢陽城の賊からの書に「我東王之所以被殺也。乃其有篡弑之心、故北王討之。戮共全家」とあり、東王は篡弑の心があつて殺されたとする。

これについて太平天国の五主八位万歳の制度から見ると贖病主、禾王で天父代言人である東王が万歳に封じられても篡奪にはならないとする見方があり⁵⁾、一方、天父代言人の東王が現実生活でも天父になろうとするのは天王を超えて宗教軍事政治の最高指導者を望んだとの見解もある⁶⁾。又、「李秀成自述」は事実に合わず東王が万歳に封ぜられた証拠はなく、逼封万歳は北王が事変を起こす口実であるとの説があり⁷⁾、又、東王には万歳を強要する必要はなく、天王は杖責を受けて東王に不満を懐き、北王を召して東王を襲わせた。事変後、北王は天王の承諾を得て逼封万歳の謠言を布め、東王残党を殺戮したのに憤慨した人心を挽き戻そうと図った。後に北王が殺されると「無詔擅殺」の謠言が、事変の後、

翼王が出走して帰らないと北王翼王の誅楊密議の謠言が生まれた。謠言は誰に有利かを考えるべきで、それは天王である、との見方もある⁸⁾。東王が殺されて後、寧国で「楊逆窃拋神器、妄称万歳、已遭天殛等語」が記された偽示が貼られたというが⁹⁾、東王が万歳を称することが天王の地位を奪うものとして天罰を受けたと宣伝されている。要は事変の2カ月前、江南大宮が潰滅したことから東王が功を誇り軍事を握って天王を凌ぐ勢力を持ったことが事変の誘因となったように思われる。

II. 密告と密詔の有無

事変の勃発は天王に東王の陰謀が密告され、天王は北王に使を遣わして密詔を下し、北王がこれを奉じて急ぎ帰京して東王を誅殺したのだというが、その時に密告と密詔があったか、否かが第二の問題である。

『雜記』は天王は東王府から帰り、天王府外の土城に鎗砲を配置し、暗に東王の来攻を恐れて「一面遣腹賊至江西調北賊韋昌輝回金陵。」と記し、又、北王は東王を捕えた際に「爾欲奪位、我奉二哥（天王）令殺爾。」といった、と記す。一方、『紀略』は東王は城門を閉じて出館を許さず、白縲の短衫を着、帯刀して腹臣数十人に護られて天王府を指して天王を刺すかの勢を示し、門内では爆薬を燃やし砲声が続けて起り、これを聞いて各館より集って天父に跪き、遠い者も続々集まる。東王は計画が行なわれないと見て急に東王府に帰り、天父下凡を以て天王を召し事を図ろうとしたが、天王は部属から東王に異謀ありと聞き、病に託して東王府に行かず、「急以情事、潜使達北賊。」と記す。王韜『甕牖余談』巻六洪逆顛末記（光緒元（1875）年刊、『余談』と略記）は東王は篡奪を謀り、功大をもって群意で万歳の尊号を称えようとし、許されなければ事を起そうとして、「而未発、其信任之左右私往白洪逆、於是密書招北賊翼賊自外入援。」と記す。李圭『金陵兵事彙略』（光緒13（1887）刊、『兵事彙略』と略記）もほぼこれに倣い、北王と共に翼王に密書が送られたとする。

天京事変のことは翌10月の初めに上海のノース・チャイナ・ヘラルドに報ぜられており、報道は demi-officielle note と別の経路から上海に届いたとある¹⁰⁾。この年、12月下旬に9カ月の旅行を終えて天京から上海へ帰った西洋人2名は事変の見聞を伝え、これに基づいて（1）E. C.

Bridgman が *The North China Herald*, No. 336, Jan. 3, 1857 に編修者宛の1月2日付上海発の報道を載せ（以下 [B] と略記）、ついでブリッジマンの報道の典拠になった Canny の口述が（2） E. A. Reynolds の “Chinkeang and Nanking（鎮江と南京）, original narrative” として *Overland Friend of China*（香港刊）, Jan. 15, 21, 30, 1857 に連載され（以下 [R] と略記）、さらに（3） D. J. Macgowan, “Contributions to the History of the Insurrection in China, XVII” (Ningpo, 27th Jan., 1857 発) が *The North China Herald*, No. 352, Apr. 25 と No. 354, May 9, 1857 とに連載された（[M] と略記）。この中（2）は A. Curwen 氏が同氏の著書 *Taiping Rebel; the Deposition of Li Hsiu-ch'eng* (Cambridge Univ. Press, 1977. 李秀成書供英訳注) の Notes に全文を収載し、その後、M. E. Clarke and J. S. Gregory, *Western Reports on the Taiping*. (Australian National Univ. Press, 1982) にも収載されている。

この事変を目撃したという西洋人の一人は Canny とよばれる人物でスコットランド出身¹¹⁾で清軍の長江防禦の洋船の砲手を勤め、1856年4月に数名と共に鎮江で太平軍に投じ、後に頂天侯秦日綱に伴われて天京に来、東王府で東王に謁してピストルの射撃の技を披露して供応を受け¹²⁾、偶々東王府近くの東王の義弟の家に宿泊中、早暁に銃声で目を覚まして事変を目撃したという。このカンニーの口述に拠って書かれた [B] と [M] は早く簡又文氏が中国語訳をして『逸経』17期（1936年11月）・33期（1937年7月）に発表され、羅爾綱・簡又文両氏が事変の信すべき史料として用いてから多数の論文に引用された¹³⁾。しかし、徐徹氏は同じカンニーの口述を典拠としながら [B] [M] [R] の記述に相違があり、事変の記述の中にも疑わしい箇所がかなりあり、カンニーは目撃者ではなく、口述は杜撰で虚構であると全面的に否定しており¹⁴⁾、方之光・崔之清両氏もこの説に賛成している¹⁵⁾。しかし、当時欧米人の元軍人・船員などは冒険心を抱いて新興の太平軍の軍営に身を投じ、王府に仕えて軍事的技能などから重用されたのは珍しくないが、たゞかれらは宣教師に比べて中国、とくに太平天国の事情に通ぜず、学識の低い通訳（カンニーの場合は広東英語を話す広東人の大工、ポルトガル語と英語を話すボーイなど）を介して知り得た事柄について誤解などがあるのはやむを得ない。[B] [M] では冒険家の話を宣教師ブリッジマン、宣教医師マッ

クゴワンが自分の知識を加えて報告を作ったと思われる点があり、同じソースに拠りながら記述が違っている。それは当時の外字紙の署名入りのレポートに共通する傾向であるように思う。又、徐氏が挙げたカンニーの口述の疑問点についても個々に検討すると必ずしも杜撰ともいえないのがあり、総じて西洋人の記述は清朝文人らのに比べて先入感にとられずに事実を伝えている点で評価されるべきだと思う。

そこで密告密詔について西洋人の記事はどう書いているかを見ると、まず [B] では「楊が信任する將軍の一人 (one of generals, in whom Yáng had confided) がなぜか洪に策謀 (plot) を告げ、洪は直ちに身を護り、ライバルを殺すため信頼する盟弟 (right-trusty royal brother) 韋昌輝 (当時安徽にいた) と提携してかれの勇敢な軍隊を召還した」と記し、[M] では「東王の高級の共謀者 (confederate of high degree) が東王の陰謀 (plot) を天王に告げて処罰を願い出た。天王は昏睡 (lethargy) から目覚め、当時安徽で出征中の北王と丹陽にいた頂天侯に助けをもとめ、その他の首領にも召集を命じたらしい」とあり、[R] では丹陽にいた秦日綱は東王の命令で安徽に赴く途中で北王と会い、天王から書信を受けて天京に帰るから一緒に帰れといわれ、天京城外に達した時に北王から東王を殺す命令を受けたと聞かされた、とあって秦日綱が密詔を受けたとはいっていない。

又密告者について [B] では楊の信任する將軍の一人とあり、[M] ではカンニーが東王府で東王にピストルの射撃の技を披露した際に東王の世子を連れていた No. 8 と呼ばれる人物が後に主人を裏切ったらしい、と記されている。[R] ではこの No. 8 は秦日綱に次ぐ Hu I-hung (胡以晄) と括弧書きで指名しているが、かれは事変の半年前に病死しているので、天王の侍衛出身で東王の側近で秦日綱とも親密な佐天侯天官正丞相陳承鎔であるとする説が有力である¹⁶⁾。この説によれば彼の密告と献策によって北王に密詔が送られ、北王と頂天侯秦日綱の部隊は深夜に抵抗を受けることなく入城し、東王府を包囲できた、という。彼は東王党でありながら生き残り、後に北王が誅殺されて翼王が再度回京した時に翼王は No. 5 (北王) No. 7 (頂天侯) と No. 8 の死に満足したと [R] に記されているから、陳承鎔に誤りなく、かれこそ事変の黒幕の役割を果たした人物と見られる。

密詔の有無は天王が事変に関与したか否かの重大な問題である。朱宗震氏らは天王は本来東王を殺すのには反対で事変後、北王の罪を宣布し笞刑に処し、後に東王残党の力を借りて北王を殺し、後年、東昇節を定めて東王遭難を追悼している。密詔は北王が東王とその党を殺して軍権を握った時に軍民に宣伝したものであるという¹⁷⁾。一方、倪正大氏は洪楊の矛盾が尖锐化して密告があり、北王は親書を見て帰京して東王とその党を殺した。翌朝、北王・頂天侯は天王府前で笞刑4百に処せられたが、その後に東王党の將士6千が殺されている。もし殺戮が天王の許可なく行なわれたのなら笞刑ですむ筈はない¹⁸⁾、という。茅家琦氏らも[B]の密詔の記述は疑わしく、李秀成、石達開の自述には密詔のことはない。『紀略』では天王は北王に殺戮を戒め、本来東王を殺す意志はなかったといっている。1859年12月、英使エルギンに渡した「詔西洋番弟」には東王の死を「期至朝觀遭陷害」と記してヤソの贖罪に比している。このことから密詔の論拠はないという¹⁹⁾。しかし、1859年11月に頒布された天曆に初めて東王昇天節を定めたことは事変後3年3カ月を経て東王の名誉が回復されたからであって、その時点から遡って過去の史実を立証することは許されるだろうか。密詔は性質上当事者と側近の一部の外は知りえないことと思うが、事変勃発の事情から見ると天王が全く関知しなかったとは断定できないように思う。

Ⅲ 東王府急襲と東王の死

事変勃発の有様は『雜記』『紀略』に詳しく記されているが、共に日時が明らかでなく、経過も異っている。『雜記』は入城した北王は天王府に赴き、東王府に使を遣わして東王に天王府に来て協議するように伝えたが、東王は怒って行かず、使を柱に縛って殺し、一方で東殿尚書傅学賢が軍を率いて漢西門大街で北王軍を待った。不意に北王は軍を率いて後街より直ぐに東王府に入ったので、東王は急いで望楼に登り、自ら梯を外し、楼上で鼓を打って部属に帰って自衛させようとした。北王の將北殿右二十承宣許宗揚は帯刀して楼柱に登ったので東王は急が迫ると見て跳び降り、廁の坑に匿れたが、許は履を見つけて東王を捕え、縛って北王の前に連れて来た。東王は「爾我金田起首、爾此時不能殺我。」といひ、

北王は、「爾欲奪位、我奉二哥令殺爾、今日之事不能全、不殺爾、我即当死。」と答え、劍を抜いて死ぬふりをし、従者が劍を奪って撃ち振り、遂に東王が殺され、親丁廿七口、王娘五四口も皆殺された、とある。一方、『紀略』は「東賊軍令凡偽官率衆出而敗回者、不准入城、必待寇他處獲利乃許入、時北賊寇江西敗回、亦不准入、頗懷憤怒、得洪賊函、即晚率三千余人、遽入南門、趨困東賊宅、自攜數賊入、殺東賊及其妻小。」内侍の少年、服役する女子も皆殺され、侍從館から変を聞いて武器を手に出て来た者は撃退され、夜が明けて「函首致天賊、請標為老奸頭、榜諸罪狀示衆。下令局各門、凡老奸所屬、無論官兵男女、悉自首、匿者連坐、數日拘得兩万余人。」と記す。[R]によれば東王の死の翌日の夜、カンニーらが天王府の門近くに泊った時、その向う側に東王の首は吊されていたのを見たという。

東王が殺された日時を考えると、前掲の両江総督怡良らの金陵内乱の情形を探聞した奏言（咸六・九・二四）に「偽北王章昌輝由丹陽敗回金陵、楊逆閉門不納、逆首洪秀全開門放進、因此起畔、互相戕殺」とあり、入城の認否をめぐる戦いが起ったとし²⁰⁾、徳興阿・翁同書奏言（咸六・八・二二）に載る八月六日に捕えられた賊首偽旅帥譚盛条の供述に「偽北王章姓於本月初三日自上江敗回帶有逆船二百余隻下駛已金陵登岸、稍歇數日、即分路攻撲浦六營盤等語。」とあり²¹⁾、八月三日に安徽で敗北して天京に帰った北王は数日休んだ後他に出征することで上陸を許されたらしく、更に佚名『蘋湖筆記』に「(八月)聞得賊匪在江寧城内、于初四日大變、賊衆自相屠殺、已將楊秀清殺了、死者万余人、至今城門未開」とあり²²⁾、これらを併せ考えると北王は初三日に数日の休止後出征する条件で天京に上陸を許可されたが、その翌四日に事変が勃発している。つまり入城問題はなく、入城すると直ちに密命による東王府襲撃が行なわれたように考えられる。

東王の死について前述のように『雜記』と『紀略』で記述を異にしており、方玉潤『星烈日記』には「先是秀清帶甲士三百人、入偽朝欲行弒、秀全知之不出朝、秀清退。秀全暗召其党偽北王章昌輝及諸偽臣曰、爾等為主乎、為王乎、僉曰、為主、遂各領衆圍秀清屋、屋牆高且堅、並環列鉄炮不能入、有偽頂天侯者勇而捷、距躍先登、衆繼之、遂入、獲秀清伏壁中、家屬數百人、悉除無遺²³⁾。」と頂天侯の活躍で壁の中に匿れた東王

を捕えたとし、『平賊紀畧』もIの文につづけて「昌輝先至，秀清招之飲，昌輝戒備以往，飲次，抽刀刺秀清，洞胸，割而烹之，尽殺其党」と記し²⁰，杜文瀾『平定粵寇紀略』卷五（『太平天国資料匯編』第1冊）もほぼ同文である。北王が酒席で抜刀して東王を殺し，詔を出して反逆として五馬分屍し，肉を煮て将兵で食ったというのは『兵事彙略』・李浜『中興別記』（『太平天国資料匯編』第2冊上）も記すところで，天条の飲酒の禁を知らぬ稗史作者の作為であろう。これとは別に『余談』には北王が東王府を囲んだ時に「東賊方屏人独自登台，僅守以一童子，蓋視台旗下偃，即東賊所謂天父下凡時也。惟東賊得以升台与語。乃即就台中斬其首。」とあり，天父下凡のように臥して死んだとする。『余談』はここに「東逆之死伝者異詞。此拋助賊西人逸出者所述恐不足信。」と注記する。助賊西人とはカンニーのような者を指すが[B][R][M]には東王の死様について記してない。このような東王昇天説はむしろ後に太平天国内で作為され西人に伝わったのではなからうか。

東王府襲撃後の有様を最も詳しく記しているのは[R]である。「朝四時，われわれは宿舎近くに砲弾が落ちて目を覚され，直ちにとび起きて街に出ようとして遮られた。街路には兵士が並んで家から出ないようにしていた。夜が明けると道路は死体で一杯なのに驚いた。それは東王府の守衛・役人・楽師・書記・召し使い達で婦人の死体も一つ見た。この時数千の北王・頂天侯の軍，それに東王軍までもが宮殿を略奪していた。われわれは群衆と共に入ったが，贅沢な調度付の部屋は見なかった。私たちは箸，ペン軸，印は金で洗面器も銀と聞いていたが，小さな金の獅子2個と金鐸1個だけを見た。数時間で宮殿は完全に略奪され，その日1日中，全市は最高の興奮状態にあった。大勢の人にはなにが起ったのかわからなかった。城門は閉ざされ，城壁の各所に警備兵がいた。われわれは東王所属の官員の財産は自分のものに出来ると聞いて馬が欲しかったので2頭を捕まえたが，その夜に北王の部下にとり上げられた。」上記と同じ場面は[B]では「夜が明け日が昇り，静寂が広がった。城の内外の門は閉められ，1人も城外に出ることは許されなかった。東王部属の官兵はすべての使用人まで2万から，3万と見られる。その中の数千はまだ監禁されてなくかれらを陥れるために非常に奇妙な戦略が考えられていた。高い歓声が聞え，その中に深い悲しみが混っていた。天王

を滅ぼそうとした楊の邪悪な謀はいま暴露された。邪な陰謀家の死のあらましを明らかにした公認の報告が発表されると多くの人々が歓呼の声を挙げた。賛美，賛美がうれしそうにあたりを響いた。」とある。又，[M]では「夜明けにかれらは屍がころがっている道を東王府へ急いだ。乱雑な現場に着くと殺されている屍の中に多くの親しい顔を見た。戦利品を持って広間から出てくる略奪者を略奪するのを待つ大群衆が中庭に溢れていた。死んでいる者，死にそうな者，男女を問わず踏みつけて奪い合い争っているのに目撃者は胆を冷やした。かれらは馬小屋から盛装した馬だけを掠めて来た。かれらが最も値打ちがあると見た品物はどしりとした銀製の持ち運びの出来る洗礼用の水槽であった。歓呼——九千歳の統治が滅んだのは本当なのか。武装した東王党が死者の復讐をしないように。なぜならかれらは天王に敵意を持っているのが分っているから。かれらを捕え，殺す巧妙な奸謀が進められている。」と記す。

この中[B][M]に東王が殺されてその統治が滅んだとして歓声が響きわたる中に深い悲しみが混っている，とあるが、『余談』が「於是城中哀歎之声雜起」と記すのはこれに拠っているように思う。又[M]で東王府の址で発見した「the body of the Great Chief」の屍を簡又文は「東王之屍」，章克生は「大頭目楊秀清的屍体」と訳しており，これに基づいて徐徹氏は東王の首は天王に送られ梟示されたので首のない屍で東王の屍と分かる筈はないとし，カンニーの口述が虚構である証拠の一つとしている²⁰。大頭目に東王楊秀清の語を付して訳した蛇足と原文を確めずにその訳語に頼った意見には承服できない。

IV 北王らの処刑と東党の惨殺

東王府襲撃の翌日，天王府門前で北王・頂天侯に対して処罰が宣告され処刑が行なわれ，その翌朝，前日に処刑を見物した東党の生き残りが二つの建物に収容されて惨殺された。[B]では処罰は北王とその將軍，[R]と[M]では北王と頂天侯に対して行なわれたとする。[R]によれば，カンニーらは事変の翌日，頂天侯に会いに天王府に行き，王府の戸口で首に鎖をつけ頭に藍い布をかぶって跪いている2人を見て驚いた。「天王府の女宣詔使（female messengers）の1人が赤い字で書かれた長

さ2.5ヤード、巾半ヤードの黄絹の大布を持って2人の面前に置き、2人が読むと東王府の官員多数が読みに集った。見終わった後、それは天王府に対面した壁に掲げられた。北王と頂天侯は幾度か宣詔使を通じて上書した。宣詔使は顔立ちのよい広東女性できれいなしっかりした声で口上を伝え、その声は30ヤード離れていてもはっきりと聞えた。伝達の合間に北王と頂天侯は小部屋に退いて相談し、最後に宣詔使2人がかれらに杖刑500を受けるよう（receive five hundred lashes or blows）宣言し、5本の棍棒が北王と頂天侯の官員に渡った。」北王と頂天侯の特定の軍官が刑を執行したが、300打った時に北王はもっと強く打て、打たないと殺すぞ、と泣き叫んでみせた。兵士たちは侯の背に手を置いて杖を受け、カンニーらも芝居（Mockery）とは知らずに侯を扇子であおぎ、手を下に置いて杖から庇った。受刑の間、数百の官民は声をあげて泣いた。東王の官民の数名もそこにいたが捕虜として首に鎖をつけて縄で繋がれていた、と記されている。なお、この処罰の理由について宣詔使の声がはっきり聞えたのに[R]には書いてない。[B]には北王と将兵は命令の限度を超えた（exceeded their Orders）と、[M]は陰謀を押えるのに必要もなく正当でない（for unnecessary and unwarranted rigor in suppressing the conspiracy）と記している。

[R]には北王処刑の時、東王残党6000名は不思議とも思わずに天王府の横の二つの建物に容れられていた。夜、カンニーらが北王らに附いて見に行ったら俘虜達は窓外にきき耳を立てて逃げようと窺っていた。翌朝、牢の戸と窓は閉められ、爆薬が投げ込まれ、戸口を固めて兵士が侵入して殺戮が行なわれた。俘虜たちは煉瓦を投げて6時間も必死に抵抗したが、衣類は剥ぎとられ精魂尽きて殺された。最後に北王と頂天侯とは敵味方を区別するために味方の右腕を袖から出すように命じた上で突撃して残り全部を殺した、とある。その後「城内の全戸の家長に家に住む男女小人を記して報告させ、各人毎に胸に着ける小牌（Small Chop）を与え、もし東王党を発見すれば捕えられるようにした。数週間に捕えられた者は5人を1隊、10人を1隊として数百人、数千人が刑場に連れて来られ、すべて斬首された。東王の炊飯をしていた女子児童も罰せられた、とある。

『余談』巻六には「洪逆妻言于衆曰、韋誅極太甚、罰及無辜、罪当刑笞

四百、若前在楊部属者可來覲、北賊亦伴認罪、越日人環集如市、洪妻宣偽天命撻北賊、至数并其佐而突以甲冑觀者、楊逆党五六千人齊被執、意謂罪不至死、皆棄械就縛、洪逆乃命尽坑之。自是日執人而戮之、雖孩提不免、經十旬而猶未已。」と記し、『兵事彙略』『中興別記』もほぼこれに倣い、『中興別記』では洪逆の妻頼氏の策で東党を慰めるために北王の処刑を觀せ、その策によって天王は東党を尽く殺したとする。『余談』巻六洪逆顛末記の巻頭の逸氏曰に髮逆のことは金陵撫談、粵匪紀略、忠首親供に抛り西人日報、洪逆刊行之偽書を参照したとあるから北王の処刑、東党惨殺は外字紙によって記したかに思える。しかし女宣詔使を洪逆の妻としたのは王韜の改竄か。

『雜記』によれば北王は東王府を出て傅学賢（東殿尚書）と巷戦3日、続いて東王の兄国宗楊□□と傅とが合同して峨嵋嶺から虎賁倉に駐營し、小瑩大行宮一带に駐營した天王・北王の軍と1カ月余り交戦した。「韋初小挫、隨後東党勢衰、計在内東党為北賊殺者約万人、屍山水関流出至下関江口不計其数。」として天京城内の交戦はつづき、その屍は西水関より流れ出て下関で長江に流れたという。又、徳興阿等奏言（咸六・九・一三）に「八月二十五・六（9.22, 23）等、有長髮尸骸由觀音門漂洶出江、内有結連捆縛及身穿黄衣黄褂者」²⁶⁾とあり、数珠つなぎに結ばれた屍などは虜われて虐殺された者のようである。汪士鐸『汪悔翁乙丙日記』に九月十一日（10.9）の情報に「安徽省偽右四檢点張奉偽天王令將楊国宗秀清之兄殺了、并楊姓三人皆殺之」とあって²⁷⁾東王残党の弾圧は天京以外でも進められ、傅学賢と共に天京城内で天王北王の軍と戦った楊国宗（元清）も安徽で殺されている。

V 翼王の第一次回京と出走

『紀略』によれば北王が東党を厳しく捜すので天王はわたしはもともと東王を殺す意志はなかった、その部属になんの罪があるのか、と北王を戒めたので、北王は天王のために大害を除いたのに、反って私を責める、と怒り、東党を皆殺しにした。これより北王は東王より専横となったので「洪賊愈畏其偏而亦無如何也。又急使人召翼賊。」とあり、『雜記』には東党惨殺の記述に続けて「先是翼賊石達開奉東賊令分股竄湖北邇上

等処、韋洪既殺楊逆，又調石逆回城，幾亦被殺。」と記し、両書では翼王回京の事情が異なっている。[B]では「天王は東王の陰謀の密告を聞いて北王と翼王とを天京に召還したが、翼王が信書をうけなかったのか、うけても従うことが出来なかったか、従わなかったかはわからない。その上に親族又は友人（東王も友人である）が殺されていたので怒り、清軍に投じようとしていたように思われる。」とある。『余談』には天王は密書をもって北王翼王を招くとあり、続けて「翼賊得洪逆書，時方在湖北洪山（武昌），以路遠發遲未及，即至逮抵金陵，則知楊已被誅，其戚亦在戮中。」とあり、『兵事彙略』『中興別記』もほぼ同じで翼王は密詔を受けたが北王が先に入京し東王を殺したのを知り急ぎ帰京したという。

「李秀成自述」は「東北翼三人不和，北翼二人同心，一怒于東。後被北王將東王殺害。原是北与翼王二人密議，独殺東王一人。……〈天王東王を万歳に封ず〉……北翼両王不服，君臣不別，東欲專尊，後北与翼計殺東王，翼与北王密議，単殺東一人，殺其兄弟三人，原清，輔清而已，除此以外，俱不得多殺。」もともと北王翼王は東王の専横に怒りを懐き，東王とその兄弟を殺そうと思っていた。「後北王殺東王之後，尽將東王統下親戚属員文武大小男婦尽行殺淨，是以翼王義怒之，後翼王在湖北洪山，知到京城害殺許多之人，在湖北紅山當中，帶同曾錦兼（謙），張瑞（遂）謀，狼輩（猗）趕回京都，」と北王が独りで東王を殺し東党をも皆殺しにしたと聞き，翼王は怒って湖北の武昌より曾・張兩名を伴って急ぎ帰京したとあり，天王の命令で帰京したとはいっていない。「石達開自述」（彙編本）には「七年，達開自江南帶人到湖北，聽聞洪秀全們在金陵彼此疑忌，韋昌輝忿氣，把楊秀清殺了。洪秀全又欲殺韋昌輝，達開聞信，回南京与他们排解。」と天王と北王との仲裁をしようとしたという。「信を聞く」とは前掲の『紀略』に照せば天王からの信書と解すべきだが明らかでない。以上の記述を総合すると天王が北王と共に翼王にも誅楊の密詔を下したとするのは咸豊の頃の巷説にはなく，むしろ北王の専横に対して翼王を招いたとする説があったらしい。これが『余談』を編修するに当り，東王を誅するために北王翼王を招いたが，北王が先に帰って東王と東党を殺したので翼王が怒って急ぎ回京したとまとめられたように思われる。

前掲の『紀略』の文に続けて「翼賊歸，城局已三月（？），不得入。射

書城上，轉請於北賊，令隻身入。入即見洪賊得其情，然後見北賊，語不合，知有害己意，俟暮緹城出。」と記す。隻身入京を許されたといっても曾錦謙・張遂謀が随行し，後に出走の時も同行している。「李秀成自述」は前掲の記事に続けて「計及免殺之事，不意北王項（頓）起他心，又要將翼王所殺。後翼王得悉此事，吊城由小南門而出，走上安省，計議報仇。」と記し，免殺のこと，即ち東党殺戮の中止をめぐる意見が対立し，その途中で北王が翼王を殺そうとしていると察知した翼王は天京脱出を図ったと見られる。[R]はこの間の事情を，翼王は天王府に行き北王・頂天侯に会うとかれらはこれまでの行動記録（account proceeding）を見せた。翼王は北王になぜ東王とその領袖で満足しなかったのかと詰問し，双方で賊呼ばわりで応酬し，翼王は「われわれは一つの主義（Cause）のために戦っている。つまり共に賊なのだ。君は自身で結末をつけるべきだ。私には関わりない。」といひ，その夜，窃かに軍を集めて西門に向ったが，北王の許可がないので開門を拒まれ，門番を斬って軍の大半は通過した。この夜に城を出なかった者は斬られた。この機会に多くの人が門外に出た。翌朝，城内は興奮状態となり，人々は武器を執って翼王を捕えようとしたが，かれの行くえは分らなかった。人々は翼王の家を掠め，その妻子と脱出できなかった従臣らを殺した，と記す。「李秀成自述」は「此時北王將翼王全家殺了」と記す。又[M]には「（1856年）9月初，翼王は天京にあらわれ，北王・頂天侯が篡奪者を殺したことに触れず，不必要に多くの兄弟を殺したことで叱責した。かれは自分が次の犠牲にされるらしいとわかって急いで集められるだけの部下を集めて天京に着いて僅か数時間で夜に門外へ血路を開き，安全に安徽の軍営に到達した。」とある。この9月初に翼王が回京したという記述について簡又文氏は9月2日の事変発生から見て早過ぎるとし，翼王は陰曆八月初七日（9.5）に魯家港（武昌）を撤退しているのでそれから少くとも10日位後の八月中旬（9月中旬）と見る^{29）}。郭廷以氏は十月初三日到北京に届いた怡良の奏言と李統賓の書牘を根拠に九月二十日から二五日（10.18-25）のことと見る^{30）}。『乙丙日記』には九月中旬の探報に翼王の母が殺されたことがあり^{31）}，前記の怡良の奏言は档案では九月二四日付で，こゝでは翼王は安徽で北王に対抗する勢力を示しているから第一次回京出走はこれより以前のことで考えられる。[R]に東王が殺さ

れてから6週間後に翼王と軍の一部が天京に入ったとあるのは概ね妥当なところであろうか。たゞこの事件が [M] のいうように1日だけの事件だったかは断定できないが、これによって殺戮は東党のみならず翼王党にも及び、天京城外へ戦争が拡がることとなった。

『紀略』によれば北王は翼王が天王府に匿まわれていると疑い、翼王の妻子を捕えて天王に引渡しを求め、天王がいないと答えるとその妻子を殺し、翼王の「反顧偏心」の罪を暴いて賞格を懸けて翼王を捕えた者に官は丞相、金6百両を与えると布告した、とあり、『雑記』には捕えた者に千金を賞とし万戸侯に封ずると四郷に掲示したとある。咸豊六年十月十二日(11, 13)付上諭に載っている湖広総督官文・署湖北巡撫胡林翼の奏報に「現聞金陵城内賊党相残、楊逆被洪章二逆所殺、石逆不服、逃出金陵。洪逆懸賞、購石逆首級、是石逆之不返金陵已可概見。此等伝言、湖北当有所聞」とあり³⁰、懸賞の布告が湖北に及んでいる。この布告が天王から出されたということは天王が初めは北王と共に翼王を討つ立場にあったことを示している。第二次回京後の翼王と天王との信頼関係にこのことが蟠りを残してないとはいえない。

VI 北王誅殺と翼王の第二次回京

北王は東王を殺した後に翼王石達開を天京から追放して天京の軍権と政権を掌握した。「李秀成自述」に「北王在朝不分清白、乱殺文武大小男女、勢逼大甚。」とある武断政治を実施し、秦日綱に大軍を率いて翼王追討に出征させた。[M]によれば「この時、われわれ冒険家たちは幕僚(Staff Officer)として従軍し、南京と蕪湖の間の長江北岸の西林山に來た。こゝには翼王配下の部隊が駐留しており、天京以外の太平軍將兵は翼王に同情して王は圧倒的に優勢な軍隊の首領になっていた。」この情勢を見て頂天侯は清軍を攻めることにし、ある城市を攻めて撃退されたが、追って來た清軍を破って大勝し、一方で広東新軍と交渉し始めたが成り立たなかった。カンニーらは侯が憂鬱そうなのを見、その原因を尋ねて北王が殺されたと聞き、近く侯も召還されるらしいとわかった。そこでかれら一行はボートで対岸に行き、歩いて翼王所属の部隊に帰順した(to make early recognition of the rising power)。「かれらが

頂天侯の下を離れてから間もなく天京から軍隊が来て頂天侯は解送され、天京で斬首された。この処刑は翼王の要求に従ったものであるが、後に確認したところでは直ぐに受け入れられたのではなかった。北王は防禦を考えて有名な磁塔が街を砲撃するのに用いられはしないかとその破壊を命じた。しかし、洪秀全は間もなく太平軍全体が支持する翼王に従うのは避けられないと見てあの若い首領の命令(behests)に従ったのである。北王は友人が少く、犠牲は2日間の戦闘で200名以内だった。」と記されている。[R]では「頂天侯が天京へ帰る命令を受けてから鎮江から東党の頭目が兵500を率いて全軍の指揮をとることとなり、かなりの不満と不平が起った。その夜、頂天侯は天京へ向った。これより先、われわれ2人の外国人とポルトガル語と英語を話すボーイは対岸に渡って翼王の軍営と堡壘に行った。そこで翼王の部下から頂天侯が南京で残虐行為のため間もなく斬首されることを知らされ、北王はすでに斬首されたといわれ、もしどんな危険でも、四つ裂きになってもよいのなら追って行けばよいといわれ、頂天侯もいないので翼王軍に加わった。そこには頂天侯軍から数人來ていた。われわれは翼王に会見を望んだので轎子が用意され、蕪湖まで4マイルほど旅した。そこには6万から8万の軍隊が駐屯していた。翼王には会見できなかったが、安心せよとの伝言があり、1人の官員の保護の下に置かれた。そこでは北王の官員の1人が首に鎖をつけられており、天京から塩漬けにして送られて來た北王の首が竿の先にあるのを見た。北王は翼王が磁塔の方向から近づいてくるのを恐れ、塔を破壊することを命じた。われわれが離京した時に塔は立っていたが、帰ったら廢墟になっていた。翼王は軍の一部で3日間、天京を攻め、北王の兵500を殺し、城市を攻略せずに蕪湖に退いた。その後、間もなく北王の首を受け取っている。」とある。

因に徐徹氏は報恩寺の塔は1853年に爆破倒壊しており、この時に倒壊したというのは事実と反するとし、カンニーの口述の虚構の証拠の一つに挙げている³¹。しかし『余談』卷八に「咸豊六年賊毀報恩寺塔。先三年賊実火藥於塔中焚之、空而不祀、至是乃毀。」(17丁)とあり、偶像廢毀で仏塔の内陣は毀されても外觀は止めていたようである。

[R]によれば頂天侯が翼王を追って安徽に出征中に天京城内の様子は大きく転換し、北王と天王とが戦って北王は敗れて殺され、秦日綱も召

還されて断罪されることとなった。北王誅殺の事情については『紀略』には北王が翼王を捜して天王府を疑い、王府前に兵を連れて出さなければ火をかけると脅して遂に互に砲火を交え、天王側では女子も男装し武器を持ち、偽の翼王旗をおし立てて北王軍を潰走させ、北王府を囲んで妻小を殺した。街には柵を設けて守らせ、日毎に口号を定めて通行人を誰何し、3日の後に北王を捕えて天王に送り、身を切り刻んで城中の柵に「北奸肉只准看，不准取」と記し、その首を函に入れて翼王に送った、とある。『余談』は「韋乃尽誅其家。翼賊怒甚，上書洪逆，請得韋首，否將攻城，韋賊自戮楊後自謂有功於洪逆，漸增德色，洪逆微詰之，負氣不相下，洪逆本思殺之去，已害至是，遂假手翼賊除之，斬韋函首，詣翼賊。乃令於營中貶之曰北孽。」と記し、『兵事彙略』は上記に加え天王は東党残党と共に戦い、数日で北王軍を破り、全家を誅殺し、僅か兵300と逃れた北王は江浦で東党に相遇して一戦して捕えられて天京に送られ斬首されたとある。北王の死について「李秀成自述」は「各衆内外合朝同心將北王殺之，人心乃定。」と記して北王の武断政治に対する天京城内の太平軍民の反対の動きを報じているが、たゞ天王を決断させたのには安徽にいて優勢な軍隊を擁して北王の首級を要求し、拒まれれば天京を攻めると通告して来た翼王の軍事的圧力が大きかったと思う。天王がこの機会に翼王の手を借りて北王を殺したというのは王韜の見解であろう。北王誅殺の日時は赫治清氏が『欽定剿平粵匪方略』『大清実録』にも該当のない徳興阿奏摺（咸六・一二・二七，1857. 2. 3，故宮博物院明清档案部蔵）に「逆首洪秀全因韋逆殺戮太多，于十月初五日計擒韋逆極刑致斃。」とあるのに拠って十月初五日（1856. 11. 2）としたのに従うべきであろう³⁹。それは[B]に「11月初め，北王に加えて符号の他の数名一特にNo. 7，No. 8で知られる2名が追放された。北王と首領2名の免職は翼王のために約1カ月前，恐らくはもう少し早く再度の回京の道を準備した。」とあるのと照応する。

[R]によると翼王の第二次回京に外国人たちは同行している。「城門は東王が殺される前のように開かれ，翼王は北王と頂天侯・陳承鎔（No. 8）が死んだので満足し，かれらの官兵は殺さなかった。」とあるから秦日綱と陳承鎔の処刑が行なわれた後，翼王は入城したことになる。翼王回京の条件として「李秀成自述」に「後將北王首級解至寧国，

翼王親看視果不差。」とあるように北王の首が翼王の軍営に送られ，首実検の上，翼王が回京に出発したことになる。赫氏はこの伝首寧国を十月中旬の初めと考え，それから出発して翼王は十月中旬中には天京に帰ったとする。その考証に李統賓の〈復劉霞仙司馬〉（書牘）に「楊逆伏誅之後，韋逆又死于洪手，石遂已入金陵，日昨初二袁州業已克復，此近来佳音或確耗也。」⁴⁰によれば十一月三日（12. 11）に武昌で李統賓は翼王の入京を聞いており，天京と袁州（宜春）との消息伝達の事情を考えると翼王は十月中旬には回京したと推測できるという³⁹。羅爾綱氏によれば中央档案馆明清档案部で発見した咸豊六年十二月二十日徳興阿奏摺に韋昌輝誅死後に秦日綱・陳承鎔が十一月初一日に誅死したと記されているという³⁹。この奏摺の原文は紹介されていないので確認できないがもしそうなら翼王回京後兩名が誅死したことになり，[R]と合わない。丙辰年十一月初二日徳興阿翁同書奏言に載っている十月二十二日（11. 17）の探報に「連日賊蹤由上江連檣下駛，均係石字旗号，多泊金陵内河並已分股潛至北岸幫守江浦等語」とあり³⁹，天京附近の江上に翼王旗を掲げる船が多数停泊しているのを伝えている。このことは翼王がすでに回京している証しにならないだろうか。

翼王の第二次回京は「合朝同举翼王提理政務，衆人歡説。」（「李秀成自述」）のように天京城内は動乱が鎮まって平穏をとりもどしたから天京事変の終焉をもたらしたことになる。しかし，天王は翼王に疑心を懐き「兵事を授けず，城中に留めて出さなかった」（『紀略』）。そして軍事を福王が掌握し，安福二王と対立して遂に翌年6月に翼王は兵を率いて再び天京を出る。一般に天京事変はそこまで延長していわれるようだが³⁹，翼王の再度の出京は内訌の延長というよりも，事変後に天王が自ら軍師となって洪氏一族による支配を固めようとしたことに伴う新たな問題とみるべきであろうかと思う。

近年，羅爾綱氏は天京事変を農民民主主義の性質を含む軍師請負制が崩れ，天王の専制独裁制への転換点と見³⁹，史式氏は内訌は神権，君権，相権，兵権の四大権力が複雑に交叉したことから必然的に起ったと見る⁴⁰。いずれも事変が太平天国の特異な政権に根ざしているとする。事変をどう意義づけるかで注目すべき見解である。（1989. 11. 30）

注

- 1) 方詩銘「記新本〈石達開自述〉」,『中華文史論叢』1979-4に拠る。
- 2) 「4. 怡良奏復探聞金陵内乱情形片」(中国第一歴史档案館「天京事変与石達開の出走」,『歴史档案』1981-1所載。
- 3) 『太平天国史料叢編簡輯』第1冊,中華書局,1961,239頁。
- 4) 同上,第3冊,1962,99頁。
- 5) 郭毅生「如何評価楊秀清」,『歴史研究』1978-8,『太平天国人物研究』,巴蜀書社,1987所収。
- 6) 周自生「対天京事変幾個有關問題的探討」,『歴史研究』1979-3。
- 7) 庄福銘「關於東王楊秀清万歳和遍封万歳真相問題考」,『江蘇学院学報』1980-1,『復印報刊資料(中国近代史)』1981-2。
- 8) 史式「『遍封万歳』の謠言怎麼来的」,『重慶師範学院学報』1982-1,『復印報刊資料』1982-1。
- 9) 「吳熙到吳煦函」(1856. 10. 18),『吳煦档案選編』第4輯,江蘇人民出版社,1983,116頁。
- 10) *The North China Herald*, No. 323, Oct. 4, 1856.
- 11) [M]にカンニーについて hails from the Land O'Cake's とありスコットランド出身だが,簡又文がアイルランド人とし,章克生訳もこれに倣う。
- 12) この件につき徐徹「天府広場大屠殺事件再質疑」,『太平天国史新探』,江蘇人民出版社,1982はカンニーらが東王から酒を賜ったのは太平条規に照しありえないとし虚構の一つに挙げる。しかし太平天国で西洋人にワインを賜った例は他にもある。
- 13) 羅爾綱「太平天国領導集团内訌考」,『太平天国史事考』,三聯書店,1955所収。簡又文『太平天国全史』,簡氏猛進書屋,1962,第17章内訌痛史。なお現在[B][M][R]の中訳は『太平天国史訳叢』第2輯,中華書局,1983に拠るべきである。
- 14) 徐徹「天府広場大屠殺事件質疑」,『遼寧大学学报』1980-2,『復印報刊資料』1980-3,および注12論文。
- 15) 方之光・崔之清「天京事变的史料与史実考弁」,『南京大学学报』哲社版,1987-3,『復印報刊資料』1987-6。
- 16) 鄒身城「胡以晄并非死于天京内訌」,『論天京事変中的關鍵人物陳承銘』,「陳

- 承銘問題統篇」,『天国史事積論』,学林出版社,1984。
- 17) 朱宗震・薛瑞祿・林金樹「『韋昌輝偽造天王密詔』説」,『中国農民戦争史論叢』第1輯,1978。
- 18) 倪正大「東王楊秀清死難真相」,『江蘇師院学报』1980-1,『復印報刊資料』1980-6。
- 19) 茅家琦・方之光・童光華『太平天国興亡史』,上海人民出版社,1980,199-201頁。
- 20) 注2に同じ。
- 21) 『欽定剿平粵匪方略』卷161,20丁,德興阿翁同書奏言,咸六・八・二二。
- 22) 南京大学歴史系太平天国史研究室『江浙豫皖太平天国史料選編』,江蘇人民出版社,1983,107頁。
- 23) 注4に同じ。
- 24) 注3に同じ。
- 25) 徐徹,注12前掲論文,284頁。
- 26) 「2. 諭怡良等確探金陵内乱事」(咸六・九・一三)(注2論文に所載)
- 27) 『汪悔翁乙丙日記』卷3,24丁。
- 28) 簡又文,注13前掲書,138頁。
- 29) 郭廷以『太平天国史事日誌』,496頁。
- 30) 注27に同じ。
- 31) 「7. 諭曾國藩等速克江西失郡并預籌招撫石達開事」(咸六・一〇・二〇)(注2論文に所載)。
- 32) 注12前掲論文。
- 33) 赫治清「韋昌輝伏誅時日考」,『近代史研究』1979-1。同論文紹介は拙稿,『近代中国』9,1981。
- 34) 『李忠武公遺書』書牘下。
- 35) 注33に同じ。
- 36) 羅爾綱『太平天国史事考』,三聯書店,1979,重印題記。
- 37) 『欽定剿平粵匪方略』卷165,14丁。
- 38) 『辞海』(歴史分冊・中国近代史)(1982)・『中国近代史詞典』(1982)の「楊韋事変」,『簡明中国近現代史詞典』上(1985)の「天京事変」の項。
- 39) 羅爾綱「太平天国興亡の分水嶺」,『広西社会科学』1987-2,『復印報刊資

料』1987-9。

- 40) 史式「神權君權相權兵權的複雜交叉——論天京內訌的必然性」,『浙江學刊』1988-3,『復印報刊資料』1988-6。